

幻の高校クラブ誌『銀稜 5号』1999年寄稿： 「フィールドワーク雑感」

志村 喬（上越教育大学）

本『新潟地理フォーラム 11号』（2015年）に「高田高校の地理教師 山崎静雄先生のご逝去を悼む—個人史的回想—」（pp.38-44）を寄稿した。そこでは、山崎先生（1928-2015：愛称・ロング先生）と長澤静雄が主宰された高田高校（以下、通称の「高高」と記す）の必修クラブ「ハイキングクラブ」は、参加した私たち高高生にとって、先生との山行を通じた忘れ難い被教育体験であったことを述べた。また、20年振りのサークル同窓会「ロング先生・長澤先生を囲む会」（1999年6月）で、ハイキングクラブ誌『銀稜4号』が山崎先生の手により刊行・配布されたことも記した。

『銀稜4号』（B5版70ページ）は、顧問の山崎静雄先生・長沢静雄先生の回想、クラブが存立した1973年1984年までの全61回の山行記録、蟹江健一氏・早津賢二氏の特別寄稿、OBからのメッセージから成っていたが、当時のクラブ員が提出した山行感想文や研究レポートは未掲載であった（私の場合、OBからのメッセージとして寄稿した「充実したハイキングクラブの2年間とその後」）は収録されたが、高校時代に「書かされた」と感じた山行感想文は未掲載）。そこで、山崎先生は、4号の「あとがき」で『銀稜5号』の刊行を計画している旨を記され、「高田高校ハイキングクラブ ロング先生と長澤先生を囲む会」（1999年6月29日）においても、クラブ員の皆へ寄稿を呼びかけられた。

そこで、同窓会時に仲間と交わした公私にわたる会話からヒントを得て、私は「フィールドワーク雑感」なる拙文を1999年7月8日付けで先生へお送りした。当時の私は、新潟県立新潟西高等学校に教諭として在籍しながら筑波大学大学院教育研究科（修士課程）に県派遣留学中（1999年4月～9月）で、サークル仲間への近況報告も兼ねた内容であった。

埼玉県へ転居されていた先生からは、原稿送付後、「皆さんから預かった原稿があるので、5号を刊行しなくてはならない。できたら、山行参加回数に応じたハイキングクラブのバッジ（金・銀）も作って配りたい。」とのお話・手紙をいただいた。

しかし、それが叶わないまま、山崎静雄先生は2015年にご逝去された。そして、諸原稿は散逸し、『銀稜5号』の刊行は幻となった。

これまで、私が投稿した「フィールドワーク雑感」の控原稿は、机脇の整理戸棚「原稿」文書ケースの底にあった。しかし、それが日の目をみることはもはやない。そこで、この機会に同原稿を本誌に掲載する。今から21年前に記したもので、内容・文とも私的で拙いが、ご海容いただきたい。

フィールドワーク雑感¹⁾

志村 喬 (昭和54年卒)

1 卒業してから現在まで

『銀稜 第4号』が届いたその時、即座に20年前にタイムスリップし読みふけてしまいました。そしてその喜びと興奮は抑え難く、妻と子供達に「ほら見ろ見ろ、これが高高時代の俺だ、カッコイイだろう」と言いながら『銀稜』を見せまくる始末。でも、家族からは「お父さんカッコイイ」との返事はなく、「老けてる高校生」との弁、続いて出てきたのは「なんで、家族のことが書いてないの。最近山登り付き合ってるのに」との言葉。そこで、最初に卒業してから今までの履歴を報告します(皆さんの近況報告はとても楽しかったですから)。

高高を卒業して私が目指したのはロングさんと同じ地理学の道、どうにか理学部にある地理学科に入学しました。そこで待っていたものは、教授連の「君、高田高校から来たの。それじゃ山崎静雄先生に習ったね」といったロングさん知ってる攻撃。さらに4年後の私の指導教授はロングさんの大学での先輩、奥様はロングさんと同級生ではないですか。いやはや驚きました。教授のお宅に行った時なんか奥さんから「ああ、山崎さんね。覚えてますよ。東北本線の駅名を全部暗記してましたよ」との話まで出てくるんですから。このように高高を卒業してもロングさんとの縁は続き、それは新潟で高校地理教員になってから一層強くなりました。今までの勤務校は、中魚沼郡の川西高校、亀田町の新潟向陽高校、そして現任校の新潟市内野にある新潟西高校です。仕事は高校の社会科(地理)の教員ですが、その他、いくつか趣味的なサイドワークをしています。その1つは市町村史執筆。最初は、ロングさんのお手伝いであった『妙高高原町史』、その後『黒埼町史』をどうにか片づけ、今は地元『上越市史』を手がけています。そのほか最近は「地理教育の在り方」について頭を悩ませています。

忘れていけない家族ですが、妻、小学2年の息子、4歳の娘の4人で、今のところ新潟市内に住んでいます。息子が5歳の秋に弥彦山登山をはじめ、その後は菱ヶ岳、国上山、角田山などに時々ハイキングに行くようになりました。その時は私が家族のハイキングクラブのリーダー。「非常食と雨具の用意は！」などと威張って指揮しています。でも、張り切りすぎで下山時のルートを往々にして欲張り、大体は「何で、こんな遠回りの下山路を選ぶんだ」との不平を聞きながら、疲れた子供を負んぶしている情けないリーダーです(内心では「遠回りの精神が大事なんだ」²⁾と呟いているのですが)。以上が卒業後の履歴報告ですが、こんな仕事と生活をする中で漠然と考えていたことに結びつく記事が『銀稜 4

1)本校は未刊行である新潟県立高田高校ハイキングクラブ誌『銀嶺 5号』へ1999年7月8日に寄稿したものである。特に断りのない限り所属・地名等は当時のものである。また、注は全て、本誌掲載のために今回付したものである。

2)「遠回りの精神」とは、山崎先生が地理を勉強する際に必要な心構えとして、高校1年の最初の地理授業時に生徒たちに語った伝説的名言。

号』にありました。そこで以下、雑駁な内容ではありますが、それら記事から考えたことを書きたいと思います。

2 高校の地理授業とフィールドワーク

現在の高校地理の中に「地域調査」という部分があり、我々の高校時代に比べて地域を調査することが格段に重視されています。しかし、実際にはほとんどの学校がこの部分をやらずにいるのが実態です。という私も、夏休み前に数時間説明した後、調査自体は夏休みの宿題にしてしまい、2学期に調査レポートを回収する程度で、お茶を濁しています。本当は、生徒を引き連れて野外に出て、一緒に調査したいのですが、それはなかなか難しい状況です。私の熱意が無いのが実施出来ない最大の原因でしょうが、やはり地理教育、ひいては高等学校教育を取り巻く状況を前にすると、躊躇してしまうのです（その理由は別のところで報告しているので、ここでは触れません）。

こんなことを考えていた私にとって、早津先生の特別寄稿「地域研究のすすめと「妙高学」の提唱」³⁾は、大変興味深いものでした。とくに「フィールドワークは、一般に10年オーダーの長年月を必要とするにもかかわらず、つねに結果が保証されているわけではない。多かれ少なかれ、そこに冒険的要素が入ってくる」「プロの研究者は、フィールドワークに手をつっこまなく（つっこめなく？）なっている」は、共感しました。自分が専攻した地理学に関して、野外でフィールドワークをする研究が減少傾向にあると感じていたからです。さらに、飛躍を承知でいいますと、教育で「地域調査」の実践が困難である理由と私が考えていることと通じるところがあると思えたからです。

多分、早津先生がお使いになった言葉の意味とは異なると思うのですが、高校生の野外での地域調査には冒険が一杯です（かつて私は、クラブの野外調査を引率して失敗しました）。また、野外での地域調査をしたからといって、それがすぐテストにでるでもなく、その学習成果は直ちに表れるものでもありません。こんな意識を持っていた私には、先の指摘は共感できたのです。

3 学校教育とフィールドワーク

しかし、実施が困難であろうとも、フィールドワークには魅力があります。この魅力は梅沢先輩が『銀稜4号』に書かれている「総合的な学習の時間の構想と成立のポイント」⁴⁾の中に表れていると感じました。今、学校現場は「総合的な学習」をどう展開するかが重要課題です。高校はまだそれほどではありませんが、小学校なんか本当に大騒ぎ（混乱）しているように見受けられます。（そんな中、大手町小学校の生活科研究に続き注目されている「関川調査隊」実践に梅沢先輩が関わっていたとは、さすがハイキングクラブOBだと思います）。

高校での総合学習をどう展開するかを論じることは私の能力を越えることなのですが、キーワードの1つは「地域」だと考えています。さらにいえば、そこでは梅沢先輩が述べ

3) 早津賢二(1999)：地域研究のすすめと「妙高学」の提唱。『銀稜4号』,pp.27-29.

4) 梅沢崇(1999)：総合的な学習の時間の構想と成立のポイントー小学校4年生「関川調査隊」の実践をもとに。『銀稜4号』,p.40.

られているようにフィールドワークが価値を持つと感じています。そんな時、思い浮かべるのは、1996年にオランダの農村地帯で見学したフィールドスタディ施設です。一見したところは大きめの普通の農家でしたが、敷地内には実験室（講義室）や宿泊棟があり、20人程度の子供達が1週間ほど滞在して総合的にフィールドワーク学習ができるようになっていました。オランダにはそんな施設がたくさんあるそうです。説明を聞いている途中「日本のフィールドスタディ施設は、どんなものですか」と聞かれた時は困りました。もしかしたら「青少年自然の家」の類が相当するのかもしれませんが、そう答えることはできませんでした。オランダの贅沢でもなく、どちらかと言えば質素で伝統的な施設での小人数フィールドワークは、日本のそれはかなり異なると感じたからです。

この学校教育でのフィールドワークに関しては、イギリスでも同様ではないかと推察しています。最近、イギリスの地理教育のことを調べていますが、かなりフィールドワークが重視されています。どうも戦後、生物科と地理科あたりでフィールドワーク教育を推進したように思われます。現在、ホームページで調べると児童・生徒向けのフィールドワーク学習プログラムを備えた宿泊施設がいくつもありますから（この辺の情報に詳しい人がいたら教えてください）。どうも、教育におけるフィールドワークの位置づけと実践支援体制が、日本とこれら国々ではだいぶ異なるように考えられます。

4 フィールドワークと野外科学

先に記したように私は大学時代、理学部で地理を専攻しました。そして、現在社会科の教師です。この経歴を言うとかかなりの人が首を傾げます。さらに、理学部地理学科で人文地理学を専攻したなどと言いますと、それは驚きに変わります。例えば、「地理は理系なのか、あなたは理系で社会科教師か、理系で人文地理が専攻できるの？」といった反応です。そんな時、かつてロングさんが授業で説明されたように「地理には、人文地理と自然地理があります」といったことを話してその場を收拾するのですが、この質問のような理系・文系の二元論的考え方に私は疑問があります。一つは、専攻した地理が総合的な学問であり、単純に理系・文系と割り切れないからです。そしてもう一つは、最近の高校生は理系・文系を極めて排他的な区分と思い込んでいるからです。例えば、「自分は文系だから、数学はいらぬ」「自分は理系だから、社会科はいらぬ」といった固定的な思考です。でも、実際、文学部の心理学科に進学すれば統計数学は多くの場合必須ですし、工学部の建築に進学すれば歴史の素養は重要なはずで、そして、各学問分野が細分化した一方、地球環境問題など多分野にわたる課題解決のためには、理系・文系にこだわらない総合的なものが必要になってきています。

実験系科学（理系学問）と非実験系科学（文系学問）という従来の学問の2分割に対して、野外科学（フィールドサイエンス）の存在と、その総合科学的性質の重要性が指摘されています。しかし、野外科学が主張されることを裏返せば、野外科学が科学界に十分認知されていないからでしょう。同様なことは、高校教育でもみられます。野外科学に一番近い科目は、地学や地理です。しかし、地理はどちらかといえば社会科の中でマイナーな存在です（例えば、受験科目としての選択者数や出題大学数）。地学にいたっては、壊滅状態。私が今まで赴任した3校全てで開講されていません。それどころか、地学教室はコンピュータ教室に転用されてしまっています。学問・科学の細分化が問題視されるように

なった現在、フィールドワークに基礎をおく野外的科学的学習が重要だと私は考えているのですが、実際の動きは反対です（だから地理や地学を必修で履修させよとは言いません。これらを含んだ総合的な学習が重要だとの意味です）。

今思えば、高専で地理と地学を勉強したことは幸運なことでした。少なくとも私にとっては、そこで履修できなければ、今の職業に就くことはなかったでしょうから。

5 フィールドワークの場としてのハイキングクラブ

上記のような事柄を『銀稜 4号』を読んで思い、最後に考えついたのは「自分にとってハイキングクラブは、野外科学たるフィールドワーク体験の場だった」ということです。いささか構えた言い方ですが、今振り返ればそれだけの価値が僕にはありました。地理をはじめとした知識、野外での体験、レポートを書くという技能を総合的に学習できる場でした（その成果・到達度は私個人には問わないで下さい）。そして、何よりも楽しい場でした。中島先輩はワクワク・ドキドキを与えてくれた「僕らのインディ・ジョーンズ」⁵⁾と書かれましたが、その通りです。知的刺激も冒険もタップリだったことが、なによりも魅力でした。

6 家庭でのフィールドワーク

ここまで学校教育とフィールドワークのことについて書きましたが、何もフィールドワークは学校でだけやることではないはずですが、自分に比べて野外体験が乏しい生徒が多いと、私は学校で感じています。しかし、先に述べたようにフィールドワーク的な授業実践は困難な状況です。さらに、それに追い打ちをかけるように、学校5日制の導入につれて遠足をはじめとした校外での行事が縮小・廃止される傾向もあります。そんな現状では、社会教育の場と共に、家庭でのフィールドワークがより大きな意義をもつはずですが、

そこで私は、冒頭の近況で報告したような家族ハイキングを、家族のリーダーとして始めたのです。この大義名分もと、私ことリーダーは、指揮を続けるつもりです。単に自分の趣味に付き合わせてるとの不平があっても、『銀稜 4号』掲載のみんなのメッセージを励みにして、。。。

(1999年7月8日記)

5) 中嶋文明(1999)：僕らのインディ・ジョーンズだった。『銀稜 4号』,p.34.